

【公報種別】特許法第17条の2の規定による補正の掲載

【部門区分】第1部門第1区分

【発行日】平成22年9月9日(2010.9.9)

【公表番号】特表2006-506994(P2006-506994A)

【公表日】平成18年3月2日(2006.3.2)

【年通号数】公開・登録公報2006-009

【出願番号】特願2004-554468(P2004-554468)

【国際特許分類】

C 1 2 N 9/12 (2006.01)

A 6 1 P 25/28 (2006.01)

A 6 1 P 35/00 (2006.01)

A 6 1 P 37/00 (2006.01)

A 6 1 P 37/04 (2006.01)

A 6 1 P 43/00 (2006.01)

C 0 7 K 16/40 (2006.01)

C 1 2 Q 1/48 (2006.01)

A 6 1 K 38/45 (2006.01)

【F I】

C 1 2 N 9/12 Z N A

A 6 1 P 25/28

A 6 1 P 35/00

A 6 1 P 37/00

A 6 1 P 37/04

A 6 1 P 43/00 1 0 5

C 0 7 K 16/40

C 1 2 Q 1/48 Z

A 6 1 K 37/52

【誤訳訂正書】

【提出日】平成22年7月15日(2010.7.15)

【誤訳訂正1】

【訂正対象書類名】特許請求の範囲

【訂正対象項目名】全文

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【特許請求の範囲】

【請求項1】

(a) 配列番号：2のアミノ酸配列に規定される細胞核D b f 2関連(N d r)キナーゼ、
 (b) 配列番号：2のアミノ酸配列と50%以上の同一性を有するその相同体および
 (c) 配列番号：2のアミノ酸配列中の少なくとも5つの連続したアミノ酸配列を含むそのフラグメントからなる群から選択される単離されたポリペプチドであって、該ポリペプチドが、特定のアミノ酸配列L y s - G l u - X - G l u - P h e / T h rを有しており、Xが、N d rキナーゼ1(配列番号：2)のT h r - 7 4または該T h r - 7 4に対応する位置に存在するアミノ酸であり、そして該T h r - 7 4または該アミノ酸がリン酸化されているか、または該T h r - 7 4または該アミノ酸が酸性アミノ酸残基で置換されており、ここで、該ポリペプチド中に存在すべき5つの連続したアミノ酸配列が、上記した特定のアミノ酸配列と同一である、ポリペプチド。

【請求項2】

該ポリペプチドがさらに、アミノ酸S e r - 2 8 1およびT h r - 4 4 4においてリン

酸化されている、請求項 1 記載のポリペプチド。

【請求項 3】

該ポリペプチドが N d r 1 である、請求項 1 記載のポリペプチド。

【請求項 4】

該ポリペプチドが N d r 2（配列番号：4）であって、アミノ酸 T h r - 7 4 に対応する 位置に存在する アミノ酸が配列番号：4 の T h r - 7 5 である、請求項 1 記載のポリペプチド。

【請求項 5】

請求項 1 記載のポリペプチドに特異的に結合する抗体であって、該ポリペプチドが N d r キナーゼ 1 のアミノ酸 T h r - 7 4 またはそれに対応する 位置に存在する アミノ酸においてリン酸化されており、該抗体が該リン酸化されたアミノ酸を含むエピトープを認識する、抗体。

【請求項 6】

該抗体がモノクローナルである、請求項 5 記載の抗体。

【請求項 7】

請求項 1～4 のいずれか 1 項記載のポリペプチドを単離するにあたり、夾雑物が混在する該ポリペプチドと請求項 5 または 6 記載の抗体を接触させて該夾雑物を除去することを含む方法。

【請求項 8】

請求項 1～4 のいずれか 1 項記載のポリペプチドを検出または単離するための、請求項 5 または 6 記載の抗体の使用。

【請求項 9】

請求項 1～4 のいずれか 1 項記載のポリペプチドおよび取扱説明書を含む、N d r キナーゼ活性を有する可能性のあるモジュレーターをスクリーニングするためのキット。

【請求項 10】

M O B 1（M P S ワンバインダー 1）をさらに含む、請求項 9 記載のキット。

【誤訳訂正 2】

【訂正対象書類名】明細書

【訂正対象項目名】0 0 1 8

【訂正方法】変更

【訂正の内容】

【0 0 1 8】

発明の詳しい説明

本発明者らは、2つの制御残基である S e r 2 8 1 および T h r 4 4 4 のリン酸化による N D R の制御、および S 1 0 0 ファミリーの E F ハンド C a 2 + 結合タンパク質との直接的な相互作用によるその活性化を詳しく特徴付けている。結果として、本発明者らは、付加的制御的な N D R 1 のリン酸化部位、すなわち T h r 7 4 を見出した。3つのアミノ酸残基すべてが、インビボにおける N D R 1 活性に不可欠である；しかしながら、S e r 2 8 1 および T h r 4 4 4 と対照的に、T h r 7 4 は、N D R 1 活性自体を直接的に制御するよりもむしろ、制御タンパク質（例えば、S 1 0 0 B）への結合に関係する。これらの残基に付された番号は、W O 9 6 / 1 9 5 7 9 に記載のようにヒト N d r 1 キナーゼ配列内のそれらの位置を示す（配列番号：1 も参照）。さらに、本発明者らは、N D R 1 と同様な方法で制御され、そして保存されたリン酸化部位である S e r 2 8 2 および T h r 4 4 2、ならびに T h r 7 5 のリン酸化に依存するキナーゼ活性を示す、N D R 2 と呼ばれるヒト N d r タンパク質キナーゼの第二のイソ型を同定し、かつ特性化した。前記 N d r 2 の配列を配列番号：3 に規定した。